

# 「腹腔鏡下大腸がん手術に関する研究」プロジェクトミーティング議事録

2016年1月14日(木) 13:00-14:45 (ホテル日航熊本)

## 1. 下部進行直腸癌に対する腹腔鏡下手術の意義

(京都大学 肥田侯矢, 岡村亮輔)

### 1) 主解析結果のまとめ

- ・腹腔鏡下手術は, 開腹手術と比較して
  - ▶ 肛門温存割合が高い
  - ▶ 術後有害事象(Grade II以上)が少ない
  - ▶ 出血量, 輸血が少なく, 術翌日の WBC/CRP が低い
  - ▶ 経口摂取開始が早い
  - ▶ 手術時間は長い(側方郭清有無で層別後)
  - ▶ 郭清リンパ節数は少ない
- ・局所再発割合, RFS, OS いずれも有意差なし(imature data)

### 2) 今後の予定

- ・今回の主解析結果では, 術後3年半~4年で腹腔鏡下手術の生存曲線が少し落ちてくる傾向にあり海外の RCT の結果も鑑みると, さらに長期の予後データを検討した方がよいと考え追加追跡調査を提案した. しかし, 本研究については一旦区切り, 長期予後については新たなプロジェクトを作成するという意見が強く, 2016年12月までの間でどのような解析をするか, 延期または新たなプロジェクトを作成するかも含め, 検討することとなった.

## 2. 高齢者における腹腔鏡下大腸切除術の有効性と安全性に関する後向き調査

(広島大学大学院 檜井孝夫)

- ・結腸癌において
  - ▶ 短期成績では, 腹腔鏡手術では, 早期の術後回復が期待でき, 合併症(せん妄, 肺炎)の発症が少ない
  - ▶ 長期成績では, 腹腔鏡手術では, 開腹手術とほぼ同等であった(3年生存率 OP81.2%, LAP85.2%, p=0.92)
- ・直腸癌において
  - ▶ 短期成績では, 対象症例数が少ないため腹腔鏡手術の優越性を結論付けることはできなかった
  - ▶ 長期成績では, 腹腔鏡手術は開腹手術と, ほぼ同等であった(3年生存率 OP70.2%, LAP78.6%, p=0.77)
- ・高齢者の全身状態(PS)不良例においても, 腹腔鏡下大腸癌切除術は, 安全に施行しうる.
- ・高齢者大腸癌の短期成績, 長期成績に影響を及ぼす因子
  - ▶ 200ml以上の術中出血量は術後合併症(SSI, せん妄), および長期成績の危険因子である.
  - ▶ 術前軽い痩(BMI18.5未満)は, 高齢者大腸癌術後の長期成績のリスク因子である.
  - ▶ 術後肺炎のリスク因子として, 拘束性換気障害, 閉塞性換気障害, 脳血管疾患既往, 開腹手術が示唆された.
- ・高齢者大腸癌においても, 十分なリンパ節郭清(12個以上)を行うことが, 安全かつ予後を改善する.
- ・開腹既往歴を有する高齢者大腸癌患者においても, 腹腔鏡手術は安全に施行しうる.

**3. 肛門近傍の下部直腸癌に対する腹腔鏡下手術の前向き第II相試験**

(国立がん研究センター東病院 伊藤雅昭)

2014年1月24日より登録開始してから2年経過し、現在の登録数215例、登録可能施設59施設。  
予定登録数の300症例を完遂するために、期間(例1年)の延長にて同意を得た。

**4. Clinical Stage 0-I 直腸癌に対する腹腔鏡下手術の妥当性に関する第II相試験**

(平塚市民病院 山本聖一郎)

最終追跡調査中で、CRFの提出が促された。次回の研究会にて発表できるのでは考えている。

以上